

# 僕のこだわり

## 職場体験学習と関連させた道徳の時間

- (1) 主題名 理想の実現 [ 1 - ( 4 ) ]
- (2) ねらい 自分自身の理想を見いだし、実現に向けて積極的に生きようとする態度を養う。
- (3) 資料名 「僕のこだわり」
- (4) 授業の展開例

	学習活動	主な発問と生徒の心の動き	留意点
導入	1 主題に対する関心を高める。	このクラスで将来、就いてみたい職業人気ナンバー 1 は、何だと思いますか。 ・医者じゃないかな ・パイロットかな ・学校の先生かも	事前にアンケート調査を行い生徒の興味・関心を把握しておく。 職場体験学習の事前学習での調査結果を活用するとよい。
展開	2 資料前半を読んで、弘志の心情を共感的にとらえる。	みんなは、弘志の友だちのように自分の夢をはっきり言えるかな。それとも弘志のように悩んでしまうかな。 ・私は、小さいときからの夢がある ・弘志の気持ち分かるよ お父さんは、なぜ、弘志のは夢ではない、ダメだなんて言ったんだろう。 ・子どもの頃から弘志を見ていたから ・本気でないのが分かるんじゃない 弘志は職場体験学習で何を学んだんだろう。 ・礼儀とかあいさつとか ・生き生きと働くことのすばらしさ ・自分なりにこだわった生き方があるってことかな	多くの生徒が、弘志に共感すると思われる。生徒指導の観点からも個々の生徒の心情を把握するよう努める。
開拓	3 資料後半を読んで弘志の変化の原因に気付く。	誰もが理想の職業に就いて、理想的な生き方ができると思いますか。そうでなければ不幸と言えますか。 ・夢が叶うのは一部の人かな ・理想の職業に就いても、やる気や適性がなければ苦しいだけ ・どんな仕事についても、その中で夢をもてる人は幸せだと思う	資料後半で明らかになるので、解決する必要はなく、課題を提起した形で後半に進む。 職場体験学習の事前指導でなされた目的部分が発表されると思われるが、型どおりにならないようしっかりと考え方とする。
締め	4 資料から離れて主題に迫る。	これから皆さんがお世話になる職場の方々のこだわりについて話してもらいました。	どんな仕事に就いても、自分なりのこだわりをもち、その仕事の中で理想を実現しようという態度が大切であることを押さえる。
終末	5 理想的な職業生活についての展望をもつ。	「子どもの時からこの仕事に就こうと思っていましたか」「仕事でのこだわりはなんですか?」「今、幸せですか?」の 3 つの質問でインタビューし、編集しておく。	

## 「僕のこだわり」

### 【前半】

先日の学級活動の時間、僕にとつてはちょっと落ち込む出来事があった。その日、先生は、来月の職場体験学習にかかわってクラスのみんなに将来の職業について尋ねた。正直、何も考へていられないわけではなかつたが、これといってなりたいものがあるわけでもなかつた。意外だつたのは、クラスの親しい仲間がなるほどと思わせるような職業を発表したことだつた。運動神経抜群の伸二の夢はサッカー選手。毎日、朝早くから夕方暗くなるまでサッカーの練習に明け暮れている伸二。サッカーにかける情熱は誰にも負けない。綾子は、小説家ときた。確かに、いつも本を持ち歩いているし、朝読の時間に読んでたのは太宰治だつたつけ。明は映画監督だと。いつも映画の話ばかりだし、スピルバーグを尊敬していると言つてたつけ。文化祭の劇の演出を買って出て、えらい熱の入れようだつた。悦子は、アナウンサーだそうだ。放送部で活躍しているし、お昼の校内放送の声は確かにひきつけるものがある。圭介のやつだつて胸を張つて堂々と応えやがつた。親父の跡をついでし職人になるんだと。あいつも毎日、きまつて店の手伝いをしている。僕の順番がやつてきたとき、本当に困つてしまつた。まだ、決めていませんとでも言つておけばよかつたのに、つい、「サラリーマンです。」と答えてしまつた。教室に笑いが起つたが、先生は、それを制して、

「先生だつてサラリーマンだぞ。サラリーマンにもいろいろあるけど、どんなことがしたいんだ。」と聞いてきた。ぼくは、それに答えることができなかつたんだ。結局、職場体験学習の希望職種の欄は「特になし」にをすることになつた。

授業の後で、みんなが僕をからかいにきた。

「弘志。なんだよ、サラリーマンで。」

残念ながら、そのときの僕は、みんなに冗談ぽく返事を返せる状態ではなかつた。それを察したのか伸二が言つた。

「弘志、おまえ昔、スポーツカーみたいなの作りたいて言つてなかつたつけ。自動車の会社に入つてサラリーマンのエンジニアなんてのはどうだ。」

正直言つて伸二の言葉は救いだつた。なんだか、僕にも夢のようなものがわいてきた感じがした。

その夜、夕飯の席でめつたに口をきかない親父が急に切り出した。

「弘志。おまえ将来何になりたいんだ。」

親父は、ガソリンスタンドを経営している。今日、学校の先生が職場体験学習の受け入れを依頼に來たそうだ。それでそんなことを聞いたらしい。僕は、今日、学校であつたことを全部話した。親しい友だちがどんな夢をもつてゐるかといふことも。それで、僕はスポーツカーを作りたいと話したんだ。親父は、「ふん。」と言つたきり、黙つて食べていたが、少しして

「弘志。おまえのは夢じやない。たぶんダメだね。」

と言つた。何でだよと食い下がりたいところだつたが、なぜか、いつものように親父に向かつていけなかつた。

「まあ、責任の一端は俺もあるな。ちょっと待つてろ。」

親父はそういうて席を立つた。親父は自分の部屋から何やら大事そうに数冊の本を抱えてきた。それはスポーツカーの写真集とその性能を紹介したものだつた。表紙もきれいなことから親父が大切にしているものだということはよく分かつた。

「これでも読んでみる。」

それだけ言つて、親父は風呂場に向かつた。

その夜、僕は布団の中で親父の貸してくれた本を開いた。昔のスポーツカーから現代のスポーツカーまで美しいカラー写真で紹介してあつた。ただ、はじめは興味深くページをめくつていたが、いつ

のまにか眠つてしまつてゐた。それきりその本を開くことはなかつた。

何日かたつたある日、三週間後に迫つた職場体験学習の職場希望調査が行われた。みんなワイワイガヤガヤとはしゃいでいたが、僕は別にどうでもよかつた。職場紹介欄には、親父のガソリンスタンドも入つていた。それでも面白そうな職場はないかと、とりあえず隅から隅まで目を通した。特に興味をひくものもなかつたが、「特になし」という欄もなかつた。それで結局、仲のいい仲二や明たちと同じ職場を希望することにした。

## 【後半】

数日後、自分の配属先が発表された。なんと第三希望の製材所だつた。サービス業よりも製造業の方が「いらっしゃいませ」を言わなくていいと思つて希望したのだ。そして、その日はすぐにやつてきた。三日間の体験学習だつた。そして、あつと/or>いう間の三日間だつた。製材所といつても材木の切断を手伝うようなことはしない。あんな大きな音のする機械のそばにいるだけで怖かつたし、おじさんたちも近づけてはくれなかつた。仕事はもっぱら工場の片づけや掃除、材木の運搬の手伝いだつた。フォークリフトにも乗せてもらつたし、建築現場への配達にも同行した。その場その場で、大工さんや設計士さん等いろんな人から声をかけられた。中学生が職場にやつてきたのを冷やかし半分で声をかけてくれるのだろうが、いいかげんな返事をしていると「元気がない」とか「しつかりしろ」ととがめられた。それにしても働いている人たちはみんな生き生きしていて、何かにつけてこだわつていだ。僕に教えてくれることは、正直どうでもいいことのようだと思ふたが、一つ一つにそういう理由があつて、なるほどと思わされることがばかりだつた。

職場体験学習が終わつた日の夕食の時、親父がまた切り出した。

「それで製材所はどうだつた。」

ぼくは、この三日間のことがありのままで話した。珍しく親父は「機嫌にその話を聞いていた。自分のガソリンスタンドにきた中学生のことも話してくれた。

「ところで弘志、この間のスポーツカーの本読んだのか。」

「まあね。」

「何だそれだけか。」

「よかつたよ。」

「たぶんそんなところだつと思つたよ。本気だつたらもっと本を貸してくれと俺にせがんださ。でも、おまえはそこまで夢中にはなれなかつた。そういうことだ。」

親父は続けた。

「おまえの友だちは、みんな夢に向かつて一生懸命何かやつてるだろ。だけど、おまえは何もしちゃあいない。本当にやりたいものつてのは、うずいづしてじつとしてられないもんだ。」  
僕には、親父の言いたいことがよく分かつた。要するに僕には、「こだわりがなかつた。何に対してもこだわるうという気持ちをもてないできたのだ。」

「親父。今度、建築家のこと調べてみようと思つんだ。ちょっとひつかかるんだ。」

「ほう。面白そうじやないか。いろいろ試してみるといい。」

その口は、遅くまで親父の昔話に付き合つた。そして、ガソリンスタンドの店長のこだわりもたつぶりと聞かされた。

今度の職場体験学習は、僕にとってのいい転機になつた。建築現場での大工の棟梁の言葉が心に残つてゐる。

「こだわりのないやつは一流にはなれん。」

僕にとっての本当の夢が、もうすぐ見つかりそうな予感がしてゐた。

# 活用に生かすための実践報告

## 「僕のこだわり」

### 1 主題の設定

中学生の時期は、人間としての生き方や社会の仕組みなどについての関心が高まり、自分の将来に向かっての理想を求める時期だと言われる。しかし、現実には、将来に対しての展望がもてなかつたり、無関心であつたりして必ずしも生徒が理想に胸を高鳴らせているとは言えない。モラトリアムという言葉に示されるように、自分が何をしたいのかを明確につかみにくい状況がある。こうした中で、自分自身が人生をかけて実現すべき価値を見いだし、積極的によりよい生き方を追い求める態度を養うことが必要である。ここでは、将来について考えるきっかけとなる職場体験学習との関連を意識した実践を試みた。

### 2 指導過程の工夫

職場体験学習の事前学習で取り組んでいることを道徳の時間に生かし、この授業で得たものを職場体験学習の中に生かせるよう資料を作成した。この資料を生かすために、導入部では、事前学習で活用した調査結果を利用した。展開部では資料に寄り添った発問を心掛けても、職場体験学習そのものの留意事項など事前指導で培われた体験活動のための知識が思考の深まりを妨げる可能性があるため、資料から離れた発問を行った。終末では、職場体験学習の受け入れ依頼を通して培った関係を生かしてインタビューに協力していただいた。

### 3 発問の工夫

中心発問は、資料を離れ、「誰もが理想的な職業に就いて、理想的な生き方ができる

か」と問い合わせた。生徒からは、「そんなの無理に決まっている」等、現実的な答えが返ってきたが、「それならば幸せにはなれないのか」と切り返すことで、どんな仕事に就いてもその中で理想を実現しようという生き方の中に幸せがあるのではないかという考えに結びつけた。

### 4 生徒の反応（授業後の感想）

生徒からは、次のような感想があった。

- ・ぼくもまだ将来の仕事のことなんか考えていなかった。早くやりたいことをみつけないといけない。
- ・わたしは自分がなりたいものがある。でも、その職業に就けばそれで幸せになれるのかわからなくなつた。その後のこだわりや燃える情熱の方が大事な気がした。
- ・今度の職場体験学習は正直めんどくさい気がしていたけど、ぼくにとってもよい体験になればいいと思う。

職場体験学習への期待が高まった感想が多かったが、こういう風にしたいという心掛けについては記述があまり見られなかつたことで、道徳の時間のねらいが達成できたと評価した。

### 5 実践者からの一言

道徳の時間と職場体験学習を関連付けることを意図して資料を作った。職場体験学習そのものに引っ張られて道徳の時間の本来のねらいが達成できない授業をみるとが多い中で、体験活動と連携した道徳の時間の在り方について考える良い機会となつた。